

「仲よし子ども館の活動と位置づけ」資料集

公文書館専門員 谷中 章 浩
小黒 七 葉
池田 茜

本稿は、本年報所収論考「仲よし子ども館の活動と位置づけ」執筆の際に、当館所蔵の「仲よし子ども館」関連資料の中から特に重要かつ貴重な資料として参照したものを2点掲載した資料集である。資料1は『仲よし子ども館関係資料④二十年史原稿』翻刻である。これは、『仲よし子ども館関係資料④二十年史原稿』と題された、「仲よし子ども館」で20周年記念誌の発刊を予定していたと思われる手書きの元原稿とそれを手書き浄書した原稿が綴ってあるもので、原稿用紙に鉛筆で記されている。未公開資料であり、仲よし子ども館の事業を理解するうえで公刊すべき意義があると考え翻刻掲載した。資料2は『仲よし子ども館 昭和35年度アルバム』であり、「仲よし子ども館」の事業開始年である昭和35年(1960)の活動が写真画像と手書きの説明文により理解できる資料である。ここでは当館で画像としてスキャンしたデータによる、アルバムの複製を掲載する。実物は縦26cm×横19cmで、表紙・中身ともに同じ厚紙製、紙に切り込みを入れて写真を挟み込んである。

なお資料1は当館池田茜専門員が翻刻にあたり、資料2は当館小黒七葉専門員がアルバムのスキャン作業をおこなって得られた画像データについて当館谷中章浩専門員がトリミング等の処置を行い、資料集全体の編集は谷中が行った。

資料1：『仲よし子ども館関係資料④二十年史原稿』翻刻

凡例

本資料は、『仲よし子ども館関係資料④二十年史原稿』を文字に起こしたものである。

表記はすべて原文ママとする。誤字脱字等のうち補足が必要と思われるものについては(注：)で付記する。

旧字や略字は常用漢字で表記する。

右寄せに記載した[1][2]…の数字は、原本のページ番号を記したものである。

[1]

はじめに

仲よし子ども館は、昭和35年にはじまり、今年が21年目を迎えました。私は、この間多くの子ども達が巣立ったこと、そして一番初めの子ども達はもう20歳を迎えたかと思うと感無量という気がいたします。

仲よし子ども館ができた頃、札幌市の教育行政は、戦後ベビーブームといわれる多勢の子ども達をかかえて大変な困難がいくつもございました。

また仲よし子ども館を行う中に、そのあり方について市民の方々、専門の先生方よりいろいろな考え方、意見等がだされました。

しかし、昭和51年11月に幼児問題審議会より「仲よし子ども館は、都市における家庭教育の補完機能を果たそうとするものである。」という答申をいただき、以来、仲よし子ども館は新たな道を歩んできたわけであります。

そんな時に、今 20 年の足どりを、新たに見

[2]

なおすことは、大変意義深いことだと思います。

そのような意味において、指導員の先生方のみならず、関係者の皆さん方にもご一読いただければ幸いです。

昭和 55 年 5 月 1 日

札幌市長 板垣武四

[1]

〔第 1 期〕

—昭和 35 年—

この年の 7 月「仲よし子ども館」は、スタートすることになるのだが、その誕生の経緯を語るまえに、それを生み出す当時の社会背景をみてみたい。そのことは、「仲よし子ども館」を知ろうとする時に、一つの視点を示唆するかも知れない。

この年は、日本の将来を大きく揺り動かす年でもあり、また札幌市にとっても、大きな変革へと次第に傾斜していく年でもあった。

全国的なでき事としては、1 月 19 日、日米安全保障条約が調印され、その批准をめぐって、国論は二分した。安保阻止の運動には、空前の民衆が参加し、6 月 19 日に自然成立まで全国各地で熾烈な運動が繰り返えされ、札幌市内でも連日連夜抗議デモが続き、5 月 20 日のデモには初めて高校生が参加して注目を集めた。こうして反対運動は、市議会にも波及し、批准阻止と国会解散を要請する請願

[2]

が相つぎ、保守、革新間で激しい論戦が展開されていたのである。

札幌市においては、本市建設の基盤をなすべき「主要事業 10 年計画」が発表されている。

その中では、急膨張し続づけるであろう本市の将来を予測し、第 1 に土地区画整理、道路、交通施設の充実、第 2 に、下水、水道、し尿等の環境衛生、第 3 に、小中学校の教育施設の新増築、第 4 に、本庁舎の建設等がもり込まれて、これにかかる費用として 322 億 7,500 万円がみこまれていた。

その中でも特に急を要したものの 1 つに、教育施設の拡充があった。昭和 35~37 年という年は戦後のベビーブームといわれた子ども達がちょうど中学校へと入学する時期にあたる。そして、すざましいばかりの中学生ラッシュがはじまった。昭和 35 年の中学入学者は 13,500 名だった。そして、3 年後には高校入学への影響は必然的であり、それを予測するものとして、すでに中学浪人が現われ

[3]

その増加が世論をよびおこした。

これに、さらに拍車をかけるものとして、札幌市のドーナツ型現象があった。住民が都市周辺部へと移行するにつれ、児童の人口分布もかたよりがみられはじめ、周辺校へとしだいに集中していった。そのため学校設備が間にあわず、特別教室をつぶし、プレハブ教室を作り、しかも、1 クラス 60 余名とするすしづめ授業を作っていた。PTA 等からは、これらすしづめ解消に関する請願、陳情が、たてつけに 7 件、市議会に提出されていた。

これに対処すべく、札幌市は、「10 年計画事業」の中で、学校建設をはじめとする教育関係には、総事業計画のうち 12%にあたる 55 億円の巨費をつぎ込むことにより、学力を低下させる 2 部授業はもちろ

ん、すしづめ授業などの不正常授業をさけるため全力を傾けることになる。しかし、現状に追いつくことは難しかった。そして、翌年、豊平町の

[4]

編入によって1,000平方軒を超える行政区域の拡大に伴って広域都市の建設に新局面を迎えた。そんな時代背景の中に「仲よし子ども館」は生れる事になった。

[5]

—誕生—

昭和35年5月17日付の道新に「仲よし子ども館」誕生予告の記事が載った。『幼稚園に通う子どもは年々多くなってきた。こうした子ども達のために普通の幼稚園と同じ内容のものをそろえた車を用意して、各地区の小公園や子ども遊園地、住宅団地を単位に、定期的に回って慰めようというもの。この指導には、幼稚園教諭の免状を持った女教師を専任、地区のお母さんたちの協力も得ることになっているが市では7月までには実現したいといっている』

ここで、「仲よし子ども館」発足当時を知るために、生みの親である故原田与作前市長の著書である『自治体生活50年』から抜粋する。

『仲よし子ども館の発想は、私（原田前市長）の子ども夫婦が東京の遙か郊外の団地に土地を求めて転居したとき、当時友達もなく、毎日一人淋しく暮っていた3歳の孫娘が巡回してきた「移動幼稚園」の園児として、登録され胸に名

[6]

札をつけてもらい、何回かの授業を受けるようになってから、毎日の生活態度がすっかり変わったと聞かされた。私の子ども夫婦はいずれも小学校の教師であったので、子どものしつけについていろいろ話しているうちに札幌でもやってみようという気になったのである。当時、文部省からは、幼児教育の重要性を訴える白書が出され、厚生省からは、保育行政の重要性が強調されていた。

しかし、その施設についてはなんらの補助もない。道においても然りである。保育所についても1ヶ所の施設に約1500万円から2,000万円近くかかるのに、国、道を合わせてわずかに100万円前後しか補助がない。そして、施設の規格についてはなかなかやかましい。いわば、金は出さないが口は出す方式である。したがって、幼稚園や保育所設置に対する市民の要望は全部市役所にしわ寄せされていたのである。

私が市長にはじめて当選した頃、札幌市は

[7]

人口が急激に増加し始め、住宅地域も郊外へ郊外へと拡がりつつあったので、これに対応する義務教育の施設ですら行き詰り、市民から大きな不満がなげかけられ、悲鳴を上げていた時代である。そこで、窮余の一策として、幼稚園や保育所には、市独自のかかなり高率の補助を出して民間経営に依存し、その足らざる部分は「青空幼稚園」で幾分でも幼児教育に役立てようとしたのである。

これならば、政府からの補助金を頂戴しないから形式も内容も自由で、教育の内容は保母さんたちの創意工夫でのびのびやればよい。

この「青空幼稚園」は、各種学校による幼稚園でもなければ児童福祉法による保育園でもない、まったく札幌市独特のものである。

だから、その名称をどうするのか迷った。私は移動幼稚園にせよと主張したが、「幼稚園と誤解される」ということでとりやめになった。だがわたし自身は、この「仲よし子ども館」が「青空幼稚園」という言葉で表現

[8]

されることがいちばん気持ちにぴったりくるように思われてならない』

こうした市長の発案をうけて、6月27日の定例部長会議で実施することに決定し、以下の点について確認している。

- ① 事業の目的は、児童福祉的な要素を主限とし、子ども達に良い遊びを指導、「自分のことは自分でする」、「集団生活に習熟させる」こととする。
- ② 対象は、不特定多数としない、地域の婦人団体等と提携し、希望するのは拒まないが、特定の子ども達をグループのメンバーとし、対象児を明らかにし、指導の責任を明らかにする
- ③ 設置箇所は、とりあえず数ヶ所を設定しモデル施設とし、まづこれに着手して成果を確かめ、その後逐次箇所を増やすこと。
- ④ 開設頻度については、毎週同一箇所については2回は必要である。
- ⑤ 雨天等の場合の配慮として、バスにテン

[9]

トを準備、あるいは、開設地区の集会所を利用、悪天候にもスケジュールどおり実施のこと。

- ⑥ 地区との結びつき等として、地区婦人組織等と連携、最終的には、子ども達が自らグループを組織し参加できるところに目標を置くこと。
- ⑦ この施設の名称も内容にふさわしい肩のこらないものとする。

この決定を基本方針として、厚生部福祉事務所社会課婦人児童係で開設準備を進めることとなったが、留意点は次の如くである。

1. 実施場所については、保育園、幼稚園の比較的少ない地域であること。また、初めての試みであることから、地域住民の理解と協力を得られる事を配慮しながら市内東西南北の公園を設定した。
2. 先生については、その公園の近くにある保育園の保母を派遣することとした。が、実際的なところ、保育園では指導員を派遣

[10]

する余裕もなく、園長自ら出かけていくこととなった。

3. 指導については、自動車で巡回することとし、市立精神薄弱児通園施設「かしわ学園」のバスを空き時間利用することとした。したがって、1日1回（午前）60分となった。
4. カリキュラム内容の実際は、設置目的を考慮してもらいながら、派遣指導員に一任された。

しかし、このカリキュラム編成及び指導内容、方法を決めるのに、指導員内部で長時間討議された。つまり、「仲よし子ども館」というものを、社会福祉的立場をとって指導するか、それとも、教育的立場をとるのかということであった。そして、参加幼児の名簿を作成すること、カリキュラムは試行ということもあり、1回1回のつみ重ねの中で逐次反応を見て作っていくこと、教材については現状では各自の保育園のものを使用して反応を見ていくこと

[11]

等を確認した。

以上の経過をふまえて、「仲よし子ども館」は、7月18日に次の予定表をもってスタートするはこびとなった。（写真1）

曜日	公園名	住所	指導員名
月	仲よし児童公園	南7西18	丸山 澄子
火	高田別院広場	南4東4	三瀬 芳子
水	やよい児童会館	菊水南町2	高岩 蘭枝

木	経王寺広場	豊平3の3	伊藤 常
金	若草児童公園	北25西7	中村 フミ
土	北光児童公園	北13東4	米沢 ユキ

当時の新聞には、こう書かれている。

『みんなニコニコ、念願の移動保育所「仲よし子ども館」開設

「幼稚園や保育所に通えないで家庭で放任されたままの幼児のために、夏の間だけでも地域の公園を会場にして移動保育所を開こうという市福祉事務所のプランが18日からスタートした。名づけて「仲よし子ども館」

(S.35.7.19 道新)

[12]

当時の受け入れは、近所の世話役のお母さん方により、参加幼児数がとりまとめられており、定員制もなく、いつでも参加することができ、毎回出席をとっていた。

カリキュラムは、紙芝居、歌、手あそび、遊戯を中心に1時間指導していた。どちらかというと一方的に子ども達に見せていくというものが多かった。

指導時には、かしわ学園の大型バスに「仲よし子ども館」という横断幕をそのつどはりつけて、公園周囲をまわって参加をよびかけていた。

[13]

〔第2期〕—ピンクの自動車が走った—

—昭和36年—

36年度は、2年目であり初年度のような間に合せの指導では対応できない反響を持つにいたった。そこで、150万円の予算を計上し、約80万円で小型バスを購入し、オルガンアコーデオン、テントを用意し、専任保母4名を配置することとした。

この年新たなる出発を前に、4月19日参加母親の代表20名と「仲よし子ども館」について懇談会が開かれた。そこでは「子ども達が絵を書いたり、折り紙をするようになった」「あいさつをするようになった」「先生と子ども達が楽器をつかって小さなオーケストラを演奏している姿を見て感激した」「今年私達の地域でも開かれることになり、お母さん方は大喜びです。地域をあげて、全面的にお手伝いをしたい」「また、夏場だけではなく、冬期も続けてほしい」などの声が聞かれた。

これらお母さん方の関心の高まりについて

[14]

当時の原田市長は次のように評している。「このように、市民の協力を求めるということもこの子ども館の特徴の一つで、母親や子ども達へ連絡をとったり、開設場所の準備や後始末のやり方を相談したりする連絡場所をそれぞれ自主的に決めていたわけであるが、このようなやり方は、特に団地の住民が持っている個々バラバラな日常生活から、隣人同士が親しみ合う機会を作るのに大きな役割をも果たしている」

事実、指導員の行う子ども達のとりまとめや、教材教具のつみおろし等は、お母さん方も手伝っている。

この1年間、「仲よし子ども館」は、多方面にも反響をよび、その協力はお母さん方のみでなく、高校生にも及んでいる。それは、札幌西高等学校家庭クラブの生徒たちで、夏休み中、桑園地区の児童公園で、保母さん達の手伝いをしてくれた。その後夏休みが終っても、ぜひ続けたいという生徒たちの

[15]

熱意に学校側も動かされ、家庭科の授業時間の一部として、毎週先生が生徒を引率して協力した。

生徒の一人は、「教室で教科書とノートの中で終わる勉強には、得られない貴重な体験をしました」と語っている。また、北海学園大の学生たちは、「仲よし子ども館」の写真を撮し、写真展を開いたりした。

10月いっぱいまで終了する子ども館の指導が終りに近づくにつれ、冬期間も開いてほしいとする母親の希望がしだいに強くなり、雪のために会場がないのなら、私達が会場をさがしますという。各新聞は、いっせいに「お母さん達が会場探し」（10月24日毎日）、（10月28日朝日）、（10月30日タイムス）という見出しでこれをとりあげている。

これに対して、当時の小塩第2助役は「それは良いことなので検討している。それには、①会場が家の中で寒くない所。②子ども達が雪道を通うのに危くない場所で、吹雪な

[16]

どの日は、送り迎えをしてくれる地区の人がいる事 ③燃料費、保母さんなどの予算 という三条件が満たされなければ難しい」と答えている。それに対して、お母さん方は、「会場探し、燃料費はこちらで用意しましょう。だから市では、保母さんの派遣をよろしく」と迫り、また、地域の人々の協力も絶大で、お寺の前庭を使用していた所は、本堂を、菊水では会場近くのお風呂屋さんが、平岸では、リンゴの選定場がそれぞれ冬の会場として提供の申し出があった。その熱意に動かされた市では、5ヶ所を設置（琴似、菊水南町、菊水東町、平岸、真駒内）し、開催することに決定した。

しかし、このような大好評の反面、1日3回の指導（①9：30～11：00②13：00～14：30③15：00～16：30）は、保母にかなりの負担をかけるとともに、お母さん方からは、4時半の終了は遅すぎるとの声もあり、翌年度は、会場増を余儀なくされている。

[16]

（昭和36年指導会場表）

	月	火	水	木	金	土
I 9：30 }	若草公園	音田別院 広場	やよい公園	四ツ葉公園	桑園公園	栄町広場
11：00						
II 13：00 }	児童公園	北光公園	日登寺広場	美園公園	みずほ公園	—
14：30						
III 15：00 }	真駒内広場	本郷広場	—	平岸広場	苗穂神社 広場	—
16：30						

（注：「音田別院広場」は「高田別院広場」のことと思われる。）

[17]

早くもこの年から「仲よし子ども館」は、将来を暗示するかのよう、急激にふくらんでいくことになる。年度別に比較してみると次のとおりである。

	昭和 35 年	昭和 36 年	昭和 37 年
保母数	6 人 ()	4 人	8 人
車両数	1 台 ()	1 台	2 台
会場数	6 会場	15 会場	20 会場
参加者数	人	1,544 人	2,292 人

(注：括弧内空欄は原文ママ)

昭和 35 年には試行的に計画され、36 年には本格的に計画され、翌 37 年にはもう倍近い規模に成長している。

また、この年、北海道拓殖銀行から、交通安全のための黄色いマフラーの寄贈をうけた。そして「仲よし子ども館」は、屋外指導のため交通安全指導に特に力を入れ、札幌三警察署の協力を得て「青空交通教室」を用いた。

この年から 仲よし子ども館の所管は、厚生局民生部青少年課となる

[18]

—昭和 38 年—

この頃、「仲よし子ども館」の受け付けは、指導会場近くの個人の家で行われていた。因みに、この年新設された鉄東仲よし広場は佐藤みつ子宅、北栄すみれ児童公園は多田進宅（38 年 5 月 7 日付 道新）となっている。このように、地域住民が、かなり積極的に「仲よし子ども館」を自分たちのものとしてとらえていた。東札幌地区では、「仲よし子ども館」の PTA 版ともいべき組織「きよみず会」が出来ていた。そこでは幼児の集合整列、会場の指導準備が母親によってなされていた。そんな母親達のため、市立保育園の園長が交代で巡回し「母親教室」を開き、幼児の育児相談を行っていた。

[19]

—昭和 39 年—

この年の 10 月 26 日「仲よし子ども館」は、時事通信記者の目にとまり、初めて全国的に紹介される機会をもつ。

この内容を抜粋すると『札幌市には「仲よし子ども館」という幼児保育機関が民生部の所管で大きな成果をあげている。幼稚園でも、保育所でもない。しいていえば、“移動幼稚園、ということになる。これはまったく市のサービス事業だ。幼稚園に行けない子どものためになっていることも事実だが、決して貧困世帯のために始めたものでなく、そうした暗さを感じさせることはみじんもない。もともと札幌市には人口の割りに幼稚園が少なく、私立幼稚園が少なく、公立幼稚園はまだない。区域が広いので、通園が難儀ということで幼稚園へ行けないという面もある。今年の運営要領によると「仲よし子ども館」の目的は「家庭や近所など小範囲の中で生活している幼児を対象に、少しでも集

[20]

団生活を通じて社会性を助長し、あわせて保護者に対する理解を深め、幼児期における健全な育成を図る」とある。教育機関ではないから関係法律などないが、しいていえば児童憲章や児童福祉法の理念を地でいっているということ。

幼稚園経営を圧迫するのではないかとの懸念は、あまり問題にならずチャッカリ組は、仲よし子ども館を、幼稚園へ入れる事前準備にしている。役所がやるということで、安直なことで終わっているの

ではないかとみるむきもあるが、しっかりしたカリキュラムもたてており幼稚園教諭の有資格者もいて、とくに3才児の集団指導の成果は教育的にも興味があろうといわれている。最近では、市教委からどんなふうに行っているか問い合わせきたくらいで、ゆくゆくは公立幼稚園の設置につながる可能性も出てきている。

とかく、しかめつつらしいお役所仕事のなかで、これはなかなか風変わりというだけで

[21]

なく、地域住民にとけこんだ生きた厚生行政という評価もあり、来年度はもっと増設しろとか、開催回数をふやせとの声が強い。(小島記者)』この事は、当時の仲よし子ども館に対する世論をとらえているものであり、また全国的にも反響をよび、各地から問合せがあった。

[22]

〔第3期〕

—昭和40年—

昭和40年度に入ると、参加人員も6,600名を越えるようになり、民生部社会課婦人児童係でする片手間的な仕事では間に合わなくなった。そこで、専用の係を民生部青少年課に「仲よし子ども館の係」としておくことにした。同時に、運営に関する規則を定め、本格的な「仲よし子ども館」の時代へと入っていく。それとともに、大規模になっていくがための問題も数多く派生してきた。

[23]

この頃の仲よし子ども館に対するお母さん方の声を昭和40年8月号の広報「さっぽろ」からひろってみたい。

「子ども達にとって先生の言葉は一週間のめやすとなっており、家庭までがそうなんです。それと仲よし子ども館を通じてお母さん同志の結びつきまで広がり、せまいカラにこもっていた家庭から、一歩外に出た感じです。」「お返事が、はっきり言えるようになりましたし、ありがとうという言葉がすらすらと出るようになりました。」「協調性が目立ってきて近所の子どもと仲よく遊べるようになりました。」

「もっと仲よし子ども館を増やし、現在の週1回から週2回にしてほしい。」「冬期間もできるだけ多く開催してほしい。」「お母さん方でも1人10円を出すとかして教材を買う運動をしていきたい。」

また、つぎのような批判的な点が新聞に掲載されるようになってきた。

① 地域により、参加者がマンモス化し、

[24]

1ヶ所ではどうも収容しきれないばかりか、指導する保母さんも精神的、肉体的にかなり強度の疲労を感じている。

② トイレ設備のない会場が多く、また参加者がマンモス化しているため、チョット用を足すというわけにもいかず非常に不便している。

③ 1週間ぎっしりつまったスケジュールでしかも1日に3会場というハードワークでは、保母さんの休養がとれないばかりか、研修する時間もとれない。

	月	火	水	木	金	土
I						
II						
III						

(注：空欄は原文ママ)

これらの点については、同時に市にとっても、年々開催要望の声が高まっている市民との間に板ばさみとなり頭の痛い問題であった。

[25]

—昭和41年—

仲よし子ども館の人気はさらに大きなものとなった。札幌市民以外の住民の注目を集める結果となった。それによって、当時はまだ本市に合併になっていなかった手稲町や、隣接の江別市の住民が、住所を偽って子どもを参加させたり年齢が3才未満であるにもかかわらず、それをごまかしてまで参加するようになったりして市民の苦情も多くなってきた。このため、41年度からは、申し込みにあたって住民票を添付させるようにした。

この年のアンケートによると、保護者の意識はつぎのようなものであった。

- ① 私立幼稚園に入園できなかった幼児の保護者は、仲よし子ども館を幼稚園と同レベルにする事を望んでいる。
- ② 仲よし子ども館を通じて子ども同志の遊びの場が1回でも多いことを望んでいる。
- ③ 仲よし子ども館に週1回参加させるほ

[26]

かに、さらに1回有志が集まり自分たちの手で同じように活動しようとする気運が高まっていた。

[27]

—昭和42年—

「仲よし子ども館の冬期会場に関する請願」が、42年12月8日市議会厚生委員会に、久保田哲郎他4氏から提出された。その主な趣旨は、冬の会場費を市費で負担してほしいという内容で、今までは暖房の費用は、約半分が父兄の負担になっているので、これを全部市費で負担してほしいというのであった。はじめは、会場も暖房もすべて父兄が準備するという前提で初まった冬期指導について、このような要望に次第に変わってきたのである。

これを受けて、市では翌年度から、市費で行うための検討に入った。

この年、幼児でも簡単に歌える明るく楽しい雰囲気「よい子の仲よし子ども館の歌」を一般募集した。

[28]

〔第4期〕

—昭和43年—

この年より、週1回の指導が隔週2回の指導となる。

この頃より、市民の幼児教育に対する関心が急激に高まりはじめたが、当時市における幼児教育の場は、幼稚園75（内公立1園）保育所41（内公立16ヶ所）そして、仲よし子ども館があった。11月18日、「札幌市内私立幼稚園児保護者に対し保育料助成に関する陳情」が出された。その趣旨は、仲よし子ども館には、幼児一人当たり年額4千円の公費が支出されているのに、私立幼稚園に対する助成が少なすぎるために保護者の負担は大きい。したがって、仲よし子ども館とのつり合いからみて私立幼稚園の保育料の一部を公費で補助してほしいという内容であった。

また、同時に、市立幼稚園を増設してほしいという要望が高まり、前述の陳情の他に4件がたてつけに市議会に提出された。同時に「市では、仲よし子ども館をかくれみの

[29]

にして、市立幼稚園を建設しないのは幼児教育に対する冷めたい仕打ちである。」という非難めいた声も聞かれるようになった。

このように市民のなかからは、私立幼稚園は、父兄の負担が大きいから市立幼稚園を増設してほしいという声が強くなってきたが、反面こんな意見も新聞に掲載されている。「札幌市には“仲よし子ども館”があるから公立幼稚園に予算をまわす必要はない。仲よし子ども館の保母の教育で十分である。有料の幼稚園にやらなくても無料の仲よし子ども館を大いに利用したらよい」 齊藤まさ子さん (S.44.2.26 道新)

市立幼稚園建設について

この時の原田市長の試算によると『当時の仲よし子ども館の参加幼児 14,000 名を幼稚園を新設して全部収容するとすれば、所要経費は、幼稚園の建築および設備費に約 20 億 3,000 万円経常費で約 4 億 1,400 万円、債務償還費で

[30]

約 4,800 百万円という巨額のもので、これを仲よし子ども館の費用に比較すれば、仲よし子ども館は、臨時費わずか 0.8%、経常費は 13%で間に合っているということになる。

もちろん幼稚園や保育所を完備して、幼児の全員をそのいずれかに収容して保育や教育をすることが理想的ではあるが、現在の地方財政の力では、それが不可能であるので、その理想に近づくまでの応急策として始めたのであるから、財政負担が軽いのは当然である。

また内容も幼稚園や保育所と同一レベルで評価することは大した意味がない。』としている。

[31]

この年より、冬期仲よし子ども館の会場借上料、燃料費等すべて市費負担となる。

このことにより、幼稚園に通わせる場合に比べて負担の格差がさらに大きくなった。とくに有料の私立幼稚園側にしてみれば仲よし子ども館の存在によって経営が妨害されるのではないかという不安にかられるようになってきたのである。

前年度に募集していた仲よし子ども館の歌が、決まった。 作詞 高橋富美子さん 作曲 近藤克子さんで、4月10日市長室でそれぞれに2万円相当の記念品が送られた。

[32]

〔第5期〕

—昭和44年—

この年から、お母さん方の熱意により、仲よし子ども館の指導が週2回となった。また、他の幼児教育施設のあり方がクローズアップされていることから、仲よし子ども館のカリキュラムを再検討し、その独自性を強調しようとした。これまでのような単に見せるという受け身的な指導をするのではなく、子ども達自身が手を加えられるような「創造性」と、「情操性」を二本の柱とした。したがって、教材も指導員の手づくりをおおいに活用することになり、これが母親の共感を呼ぶことになった。

例えば、1972年冬期オリンピックをひかえ先本キヌ子、枝松愛子両指導員の創作による「札幌オリンピック体操」が指導に取り入れられている。この体操の創作は、昭和44年12月26日に、市民のオリンピック意識の向上と幼児および児童の健康増進に配慮したとし

[33]

て、「札幌市職員の提案に関する規定」の3級の表彰をうけている。

これら前向きの指導に、市民より多くの感謝の意がよせられた。たとえば、子ども館に通っていた子が小学校に入学したので、その内祝の気持で2万円寄附したいという匿名の市民があらわれたり、子どもの誕生日に受け持ちの指導員を自宅に招待したいなどであった。

[34]

—昭和45年—

この年まで仲よし子ども館には、夏休みというものはない。しかし、お母さん方から仲よし子ども館にも夏休み制度を作ってくれという声が大きくなった。というのは、小中学校が夏休みに入り家族そろって旅行しようと思っても、仲よし子ども館が休み出ないので行くことができない。また、この時期は暑く、しかも戸外であるため、幼児の健康管理の上からも休みにしてほしいという親の願いであった。更にこの時期は、指導員の体力の消耗度も激しいことでもあり、新たに夏休みを設けるにいたった。

そして、この年あたりから、仲よし子ども館のあり方についてさまざまな声がとびかうようになってきた。

45年1月7日付で小林快哉氏から「保育行政の是正に関する陳情」が市議会に提出された。その趣旨は、「仲よし子ども館は、母親が付き添うことになっており、生活にゆとりのある家庭の児童を対象としたもので、福

[35]

祉的意味がないこと。子ども館の保母は、1人当りの受け持ち人数が多いので、名前すら覚えることが困難なくらいだから教育的意味がないこと。このように中途半端なものに年間8,000万円近くもの税金を投入していることは、再検討すべきである。保育所でさえ月額3,000円～7,000円の保育料を父母が負担しているくらいだから、無料で子どもを預ける仲よし子ども館とのつり合い上、保育料の父母負担を軽減し、また保育所勤務の保母の待遇を改善すべきではないか」というものであった。

この陳情は、仲よし子ども館が無料であることで、次第に私立幼稚園の経営を圧迫するようになってきたという前提に立って、私立幼稚園が仲よし子ども館を幼稚園と同様に有料にするか、あるいは無料のまま今後も続けるならばその対象範囲をできるだけ縮小させたいということがそのねらいだったといわれている。

この頃、発行された仲よし子ども館だより

[36]

の中に当時の保母さんの感想をひろってみよう。『数ヶ月前までは、母親の姿を追っては泣き、出席カードにシールが貼れないといっはめそめそしていた子どもが、活発に劇を演ずることもできるようになった。冬期に入ってから落ち着きがあらわれ、社会性と同時に友だちと楽しく遊ぶことができるようになったのを見るのは楽しい。自己中心的であった家庭から、集団の中で他に歩調をあわせ、協力し合ったりゆずったりする心を身につけたのは、大変な成長であると思う。満足に返事のできなかつた子ども、絵も書けなかつた子ども、そして、自分の意のままにならないと泣いて親のもとへ逃げた子ども、そんな子どもたちが大きくなった時、その頃の話しを聞かせてやったら、どんなにびっくりするだろうか。』

この年の仲よし子ども館の準備に際して、原田前市長は、仲よし子ども館の担当者に、仲よし子ども館の目的と指導内容を市民に周

[37]

知させることを重ねて強調している。これは、幼稚園と同レベルとしてとらえている多くの市民への誤解をとくためであった。

[38]

—昭和46年—

昭和46年5月1日、この日をもって「仲よし子ども館」の生みの親である原田市長は、3期12年の任期を終り、札幌市長を退任することになった。原田市長の就任期と退任期を比較してみたい。人口は2倍に、市の面積は4倍に、予算の額は、実に19倍となっており、まさに札幌市が急激に大型化していく激動期でもあった。

原田市長は退任にあたり次のように心配した希望して、仲よし子ども館の成長を板垣市長にバトンタッチしたのである。

『私自身、仲よし子ども館がこのように全市にわたってマンモス化しようとは予想もしていなかった。これから先、青空幼稚園はどのような途を歩んで行くのだろうか。おそらくは、幼児教育の重要性という課題を御旗にして、市民の側からは、仲よし子ども館のますますの拡大と、さらに週3回、あるいは、毎日でも実施してほしいというような要

[39]

望が出されてくるかも知れない。一方、私立幼稚園や、保育園の側からは、いっそう目の上のコブのような存在として、仲よし子ども館のような中途半端のものは幼児教育の発展を阻害するという意見が繰り返えされるのではないだろうか。

私は、保育所とか幼稚園というような規格にこだわらず、僅かの時間を利用して子どものしつけや協同生活を楽しめるような気持を子どもに植えつける簡便な施設を政府は公然と認め援助すべきだと思う。子どもは、遊ぶことによって育つのである。』

それは、幼稚園、保育園が法令をバックボーンとしたハードなものにとらえるならば、仲よし子ども館は、何ものにもとらわれないソフトな幼児教育の場としてとらえようとしているのではないか。

それだけに、未知なる可能性をひめたものとして、限らない期待を原田市長は感じていたにちがいない。

[40]

その反面、仲よし子ども館が発足以来10余年を経過してもなお、体系づけられていないことも事実であり、市民に未だ十分に理解されず、指導員及び市の担当者自身も試行錯誤の連続であった。

『ありがたいけれど物足りぬ』という見出しが6月7日付の道新に載った。内容を要約すると次のような記事である。まず、当時の藤戸課長の『近ごろの家庭は、過保護の傾向が強く、家庭教育だけでは子どもたちが、わがままに育ってしまう。同じ年ごろの仲間といっしょに遊び、集団生活を通じて社会性をのばし、集団のルールを身につけさせることが仲よし子ども館の目的です。』という談話を載せて次のように続けている。館の開設される日は、お母さんが子どもに付き添って来て、指導が終わるまでかたわらで見学、終わると、子どもを引きとって帰ります。

このように、母親に付き添われながら指導

[41]

を受けるのでは本当の集団指導になるのでしょうか。昨年、4才児を通わせ、この4月から幼稚園へ入れたある母親は「子ども館では1年行っても仲よしができず、遊戯などもキョロキョロしながらやって集中力がつかなかった。幼稚園では1週間で友達ができ、通うのを楽しみにしている。」と述べています。この点について、札幌静修女子短大の宮内克男教授（児童心理学）は、「母親が視界内にいるところでは、幼児はどうしても依存心を持つから、集団指導の効果は上がりにくいと思う。」といい、さらに「週2回しか親を合わせる機会がないのでは、仲間づくりもむずかしい。仲よし子ども館へ通うとい

う習慣も、子どもの生活に根づかないのでは」とつけ加えています。そして、幼稚園、保育園とは違うといっても、年間の指導計画をみると、幼稚園の指導要領ほとんど同じで、これでは母親が“簡易幼稚園”と受け取るのも無理はない。きちんと決まった指導計画ではな

[42]

く、弾力性のある方針のもとに、子どもたちの自由な遊びのなかで、集団ルールを身につけさせる方が巡回制をとる限り、適切な方法ではないかと提言しています。』

また、仲よし子ども館についてこんな見方もあった。機関紙「なかよし子ども館」7月号を読んでみたい。

『週2回の待ちに待った子ども館の日「ママ元気よ。」「晴れているよ。」と言う娘達の声。「明日は晴れるかしら」と言いながら、てるてる坊主をつるして寝る子。こんな子ども達の喜ぶ「子ども館」。それなのに、5月の末に子ども館できちんと並ばず、甘えて泣いてばかりいた4才の子が母親におしおきされ、誤まって死んだという記事を読んで私はこう思いました。あせらなくてもよかったこと。参加当初は泣きさげでいる3才児がたくさんいます。でもそれも1年たったらびっくりするほど成長します。泣き虫も、きかん坊も、4才になるとお兄さん、お姉さ

[43]

んになって、おすまししているのですから。一中略—私が参加したのは3年前、年々良くなる指導内容に喜んでいきます。工夫を減らしてより良いものにとという前向きの姿勢がうれしいのです。「何というお友達がいるの？」パパに聞かれて何も言えなかった娘達も2年目からは、お友達もたくさんできて、とても明るい子になりました。』（梁川由美子）『開館答辞は、雨降りが多く、お子さんはもちろんのこと、お母さんをも心配させましたが、回を重ねるうちに、お子さんと指導員も仲よしになり、大分落ち着きました。1時間半という短い指導ながらも、子どもたちの心には、一緒に遊んだ友だち、そして私たち指導員の姿が映っていくわけです。子ども館の車を見るなり、目を輝かせ、手を振ってくれる子、以前参加していた小学生がなつかしそうな視線を投げかけてくれる光景を見ると、1時間半という、貴重なふれ合いを大切にしないでと強く感じるのです。』

[44]

（指導員 吉川妙子）

また、当時の機関紙には指導員たちのこんな苦勞(?)話しも載っている。

『雨につきまとわれた開館式も、どうにか済み、楽しかった遠足ごっこも無事に終わった。7月にむかって、私達の顔も手も、日ごとに黒さを増し、恥ずかしさを一段と増してきた今日、この頃。子ども達と無邪気に走りまわっているうちはいいが、うら若い男性に出逢ったときに思わず、そっと手を縮めてしまうのは、やはり年頃のせいかしら。

それにしても、貧弱な焼け方。まるで、1ヶ月もお風呂に入っていないといったような汚なさ。擦ったら、ボロボロと垢がでてくるような手になっちゃって。どうせ焼けるなら、あの道路工事のおじさんみたいに、底光りするような黒さだと自慢もできるのに。

元気に遊んでいる子ども達も、日焼けと汚れとでまだらに黒ずみ、思わず自分の手と見比べてしまう。でも、手足の汚れは、洗え

[45]

ば落ち、服の汚れだって、石けんできれいになるはず。手や足がいくら汚れていても、心は青く澄んだ瞳と同じように、真白く、澄みわたっている子ども達。その白い心を、そのまま育ててあげるのも、染めかえていくのも、おとなの心がけ次第だと思う。汚れる前に手を借してあげ、導いていくのが母親の役目であり、私達の務めなのです。

黒くなっていくこの手を眺めながら、おとなとしての、指導員としての役割について、いま一度、考えなおしています。』（指導員齊藤幸）

[46]

〔第6期〕

—昭和47年—

この年4月、札幌市は、人口 人を有し、川崎、福岡とともに指定都市となり、それまでの東京、大阪、名古屋、京都、横浜、神戸、北九州に加わり、日本の10大都市を形づくることになった。このことにより、札幌市は、区制がひかれ、仲よし子ども館も、これまで1ヶ所にまとまっていたが、これを機に7区の福祉事務所社会課社会係に分散することになった。

その時の班編成は次のとおりである。

中央区→2班、北区→2班、東区→2班、白石区→3班、豊平区→2班、南区→2班、西区→2班、むろん、車両もこれまでの1ヶ所管理から、それぞれの区に分割管理になった。

全市のまとめを市民局青年対策室が行うことになった。

[47]

—昭和48年—

この年仲よし子ども館は、重要な局面を迎えることになった。同時に、大きな方向転換への起点にもなった。

それは、仲よし子ども館初まって以来初の3才児500余名の未収容児を出したことにはじまる。これまでは、希望するものは全員が収容できたのである。これによって、母親たちの間では、幼児教育の場の拡充が叫ばれるようになった。しかも、仲よし子ども館のとらえ方もまちまちであった。

指導員内部においてさえ、一方で仲よし子ども館を幼児教育の一環として捉え、現状として、不十分なながらも全面的に幼稚園の方向を辿ろうとする者があり、また一方では、仲よし子ども館独自のあり方を模索し幼児の集団性、社会性の涵養に意を注ぐ者もあつたりした。

これらの問題について、当時の青少年対策室は、次のような考えをもっていた。

[48]

つまり、これらの問題解決には、単なる意見調整や、指導技術の研修では解決し得ないものであり、むしろ仲よし子ども館そのものの理念づけが先決であるとし、「仲よし子ども館の理論化の不充分さ、またそれに起因する指導員の考え方の不統一が、カリキュラムの編成に際して多様な見解、意見を派生させ、指導内容そのものにたえず曖昧な要素を混入させる結果となり、作成されたカリキュラムは、各領域の羅列に終始し、単に細部のみがますます完璧に彫琢される傾向にある。

現時点においては、仲よし子ども館の特殊性あるいは、独自性を生かした形での理念設定は困難であり、今後様々な機会を通じ、単にその範囲を仲よし子ども館の指導員だけではなく、関係職員、また幼児教育関係者等の参加を求め、討議、研究、協議を重ねる必要がある。」とした。

この考えを背景に当時の青少年部は、仲よし子ども館のあり方について根本的な解決を

[49]

試みることになった。

昭和48年6月29日、札幌市幼児問題審議会条例が制定され、8月21日に佐藤麟太郎氏を会長とする第1回目の札幌市幼児問題審議会が市長会議室で開催された。以後答申が提出される昭和51年11月17日まで、3年2ヶ月余にわたって審議が続けられた。

この審議会には、次の諮問事項が板垣市長から示されていた。「① 札幌市における幼児教育の基本的方向と幼児教育施設の相互関連について ② 仲よし子ども館の今後のあり方について ③ 家庭保育のあり方について」である。

そして、この年仲よし子ども館と平行して青少年部独自で行った「よい子の広場」が登場した。これは、今後、大量にでた未収容児をカバーしようとするねらいもあったが、日常の遊びの中から仲間意識を育てようとするものであった。男女2人の指導員が、教材教具を持たず素手で幼児の中に入っている

[50]

き、遊びのひろがりの可能性を試してみようとするものであった。これは、人数の制限をせず、また意図的に幼児を集めようとするものでもなかった。いわば、近所のお兄さん、お姉さんが近くの子ども達を集めて遊んでいるという雰囲気の中で指導するというものである。

この年、機構改革のため、仲よし子ども館の所管が青少年対策室より厚生局青少年部となる。

[51]

—昭和49年—

依然として仲よし子ども館の人気は年々高まり、参加幼児数は増える気配をみせていた。市側でもこれに対処すべく2班を増班し、指導会場を10ヶ所増の103ヶ所として、約21,500人の定員枠を用意した。しかし、幼児人口のかたよりもみられるため一部地域で全員収容が可能かどうか予断を許さない状態にあった。

受付を終えてみると、応募者は定数を下まわったものの、やはり一部地域でのかたよりがみられ、結局、3才児の早生れを中心に誕生月日の早い順に選ぶことになった。その結果、3才児約300人の未収容がでた。この選出方法には、母親からの抗議も沢山あった。それは、小学校では、早生れも遅生れも同じく入学させているのにどうして仲よし子ども館だけは差別をするのかというものであった。しかし、同じ3才児であっても、3才になったばかりの子と4才に近い3才児とでは、体力的にも大きな違いがあり、5才、4才そし

[52]

て3才後半の幼児中心のカリキュラムを組んでいる現状では、少々無理があるということで断わった。

しかし、2年つづきの未収容児がでたことで、東区では時間のあいた保母さんたちが5名でチームを組み3才児約100名を集めて週1回金曜日東栄公園で「3才児の広場」を実施した。内容は、仲よし子ども館に比べて、かなりラフなものだったが、お母さん方に大好評を得ていた。

また一方では、よい子の広場も2年目を迎え、遊び中心の指導が、小地域に歓迎されていた。

そんな中で、仲よし子ども館の指導内容も単に従来通りの流れの中にあるだけでなく、カリキュラム一つ一つに指導員のアイデアが積極的に導入され、各区の工夫のあとがみられるようになってきた。

反面、私立幼稚園に通う幼児を持つ父母は札幌市立幼稚園連合会と同PTA連合会と

[53]

もに、父母負担の軽減のため市費補助を大幅に増額して欲しいという要求をかかげて、20万人書名の運動を展開した。その主張とすることは、「このままでは、札幌の幼稚園教育は破たんする。この責任は私立幼稚園が負うべきものではなく、市は、本腰を入れて補助、助成策を講じてほしい。」(菅原会長9月11日付道新)というものであった。

この年3月12日、「札幌市における幼児教育等のあり方について」(中間答申)が札幌市幼児問題審議会(会長 佐藤麟太郎)より板垣市長に提出された。その中では、仲よし子ども館の果たした役割は、先駆的な意義を認めるが、今後、幼児教育施設の整備と相まって漸次質的転換を図るべきだとし、将来

は3才児中心とすべき示唆をしている。この答申にあわせて、佐藤会長は、幼稚園の増設と私立幼稚園への助成が重要であり、仲よし子ども館の今後のあり方との関連からぜひ取り組んでほしいと語っている。

[54]

—昭和50年—

この年、全員収容を目標に2班増班し、21班体制を組み、115会場、定員数23,330人を用意して受付を開始した。

しかし、応募者はこの定員数をはるかに上まわる約24,900人の希望者が殺到した。内訳は、5才児約2,500人、4才児約10,000人、3才児約12,400人であった。

このため市では、定員数に約450名を上のせして、約23,780名を収容することを決定するとともに、各指導会場の受付数の洗いなおし、また希望会場の調整を急いだ。その結果、4才、5才児は、全員入館が決ったものの、3才児については、1,140人の未収容児を出さざるを得なくなった。それでも、市内の全3才児の49.9%、4才児は、47.1%が仲よし子ども館に入館したことになる。

反面、幼稚園にあっては、この年初めて前年度より入園希望園児数が700人程減少した。このため、私立幼稚園は、園児確保のため来

[55]

年度は一斉値上げはしないことを申し合わせている。

一方「幼児問題審議会」では、答申の方向づけができつつあった。その基本的なものとしては、①お母さん方は、幼稚園、保育園に近い保育内容を期待しているが、近い将来それらが充実してくることを考えるならば、今後は、幼稚園、保育園の補完的な立場に立つべきでない。②仲よし子ども館はむしろお母さんたちの家庭保育ではまかないきれない部分に焦点を合わせた性格づけが必要である。③将来は、5才児をはずし、4才・3才児を対象とすべきだとの意見が論議されていた。

[56]

—昭和51年—

この年の受付けも、希望者が殺到する。受け入れ体制は昨年規模であったが、既設会場で狭い会場は、広い会場を移し変えるなどして、少しでも収容枠を広げようとした。

しかし、24,000人の定員数に対して、25,570人の希望者があった。この結果、収容率をギリギリ高めるために、一部公園への申し込みがかたよった地域の父母に対して、他の空いている公園へまわってもらえるよう説得するため電話作戦を展開する。

その結果、かなりの収容率をみたが、反面「第2会場へは遠くて不便」「どうしても第1会場でなければだめだ」という希望者も多く、仲よし子ども館参加を断念した父母も少なくなかった。だが、最終的には、昨年を約600人上まわる24,200人を収容することができた。

こうした人気の背景となっているものはなんだろうか。8月に大谷短大で実施した「仲よ

[57]

し子ども館に関する母親の意識調査」の一部を抜粋してみたい。それによると、「仲よし子ども館に参加させている理由」のベスト3は、①集団の経験をさせるため(40%)②近所に友達がいなかったため(11%)③費用がかからない(11%)であった。

次に「参加した子どもへの効果」のベスト3は、①友だちと遊べるようになった(21%)②自分のことは自分でできるようになった(13%)③楽しみにしている。喜んで行く(10%)となっており、母親の満足度に答えている。しかし、「何才から参加させたいか」という問には、3才から参加させたい

とするものは、77.6% 4才から参加させたいとするものは、13.5% 5才からは、0.9%となっており、5才児については、小学校入学を意識してか、幼稚園をよしとする傾向がでてきている。

その間、「幼児問題審議会」は11月に答申を出すべく細部にわたって激論を戦わせてい

[58]

た。その様子は、新聞等で逐次とりあげられ、幼児をもつ母親の注目をあつめていた。

例えば、審議会の討論の過程の中で、「若干の経費を父母に負担してもらったら」という話しが出たと報道されれば、ただちに新聞に次のような投書が載り、その反応の速さを感じさせた。「答申では若干の経費負担が盛られているようですが、これまでもクレヨンなどの教材の用意が必要でしたのでその程度は覚悟しています。幼稚園の補足のカリキュラムではなく独自の指導をすることも結構だと思います。ただ、3才児のカット問題はなんとかならないでしょうか。」(成田さん)「内容をより充実させてくれるのなら月に2千~3千円程度の経費負担は仕方ないと思います。ただその内容は幼稚園的なものというのが願いです。お母さんも一緒に勉強するのは賛成です。」(鈴木さん)「5才になる男の子が入っていますが、引っ込み思案だったのが、大勢の子と遊べるようになり予想以上

[59]

に子ども館のよさを感じています。でも経費については、母親の教育費の一部をとということですが、教育とひきかえに金銭をとるという発想は余り納得できません。」(鈴木さん) —11月19日道新—

そして、昭和51年11月17日「札幌市における幼児教育のあり方について」の答申が、札幌市幼児問題審議会々長佐藤麟太郎氏より板垣市長に提出された。その中で、仲よし子ども館の性格づけについては次のように明確化されている。「仲よし子ども館は、一般の家庭機能では果たし得ない集団の場を母と子に提供する性格、すなわち『都市における家庭教育の補完機能』を果そうとするものである。」あわせて、「仲よし子ども館は、特に母と子が共に参加しているところに深い意義と特色がある」としている。

指導目標の設定については、①幼児の自由活発な遊びを中心として、特に健康づくり、体力づくりを積極的にすすめるものとする。

[60]

②母と子のふれ合いを基盤とした集団活動を通じて、親子の愛情、子ども同士のつながりを深め、併せて自主自律の精神の発展をはかるものとする。③子どもを介して親同士の交流を深め、子どものための適切な環境づくりへの気運をかためるものとする、となっている。また、特筆すべき事は、母親参加のあり方について、母親学習の場が大切であることを主張している。

この答申をうけて、ただちに市及び指導員は、区単位であるいは、全市協議会等で勉強会を開き検討した。同時に現在使っているカリキュラムの見直し作業もそれぞれに始められた。その作業は、これまで16年余の積み重ねの中であって一朝一夕にできるものではなく真摯な論議の中に時間が費やされていった。

時を同じくして、文部省が幼稚園のための「指導資料づくり」をはじめた。その理由として、我国に幼稚園が生れて100年になるが受験戦争のあおりもあって、最近では教育内容

[61]

が混乱気味となっている。そして、安全などを強調するあまり、「してはいけません」的教育になっているきらいもあり、「従順だがひ弱な子どもばかりになっている」との批判があり、そのような現状を改革し教育内容の充実を図る必要があるとしている。例えば、小さなけがを恐れるより、小さなけがによって大きなけがを防ぐというような積極的な方向にもっていこうとするものであった。

また、この頃、話題となったのは、保母さんに対して、“保父さん”であった。全国的にも保父さんの出現がめだちはじめ、50年8月には、「全国男性保育者連絡会」ができていたりしている。実際に保父のいる

園では、男性としてのキャラクターが、保育内容を豊かにしているとし、その役割の果す大きさがあらためて見なおされてきている。

この年、機構改革のため、仲よし子ども館の所管が 市民局青少年婦人部となる。

[62]

—昭和 52 年—

このところ毎年未収容児を出してきたことが、市議会でも問題にされていた。この年には規模こそ昨年並であったが、臨時班を青少年婦人部に作ってでも「全員収容」を目標に内部でも検討を重ねてきた。その結果受付終了後の申込みの数字をみて臨時班の規模を考えることにした。いよいよ関係者の見まもる中で 52 年度の受付が開始された。しかし、受付終了後の数字をみると、申込者数、25,700 人で昨年の約 100 人増でしかなかった。これを全員収容すべくただちに市本庁青少年婦人部に 3 班分の臨時班よいきの広場を設置し、各区への応援体制を整えた。その結果、申し込みのほぼ 100%を収容することができた。

この年のスタートは、雨に見まわれて開館式を思うようにできなかった。各区では、母親から開館式を実施するかどうかの問合せが殺致し電話のなりやむ時がなかった。現地で晴れていても、市内中心部では雨だったりし

[63]

て札幌市内の天候の複雑さをいやというほど思い知ったのもこの年であった。

この年の特徴として、第 1 にこれまで 3 才児は夏場のみであったが、将来 3 才児通年指導を意識して冬期 2 回のお楽しみ会的なスクーリング「母と子のつどい」を開くことになった。第 2 に、母親の勉強会のために、講演会、家庭教育の手引書、機関紙の発行等を実施した。講演会は、参加者こそ少なかったが、内容については、充実したものだという声が聞かれた。また、母親のための「あそびの実技指導」も「知らない人と友だちになれた。」等の好評を得ていた。しかし、115 会場を回るための指導は困難がつきまとった。指導協力は、全面的に札幌グループワーク協会に依存したが、指導員の絶対数が少ない事と、各区のカリキュラム内容に支障を来さない範囲でローテーションを組まなければならなかった。

[64]

—昭和 53 年—

この年の 3 月 13 日に開かれた予算委員会で、湊谷委員が仲よし子ども館について質問した。

それに対して、神戸市民局長は、「来年度は、3 班を増班し、希望者を全員収容したい」と答えた。

翌日の新聞は一斎に「仲よし子ども館全員入館」見出しで発表した。

事実、市では、3 班増の 24 班、会場も 15 会場増の 130 会場、各区においても幼児人口の分布状況を予想しながら会場設置の見なおしを行っており、昨年度規模の約 26,000 人を臨時班なしで受け入れる体制を整えた。

子ども館受けつけの前日、4 月 11 日の毎日新聞全国版に、仲よし子ども館の特集が載った。内容を要約すると『札幌市に全国でも珍しい市立の移動幼稚園がある。正式名称は「仲よし子ども館」。幼稚園でも保育園でもない。極めてあいまいな性格。だが毎年 2,000 人もが希望しながら参加できないほどの人気がある。その秘密は、参加費用が

[65]

まったく無料ということにあるようだ。

子ども館が初まったのは、幼児教育ブームのはしりの35年。当時の札幌市は人口が急増し、義務教育の施設を拡充するだけで財政が行き詰まり、幼稚園や保育所の設置まではとても手が回らなかった。そこで、窮余の一策として考え出したのがこれ。だが量的には拡大の一途のこの青空幼稚園にも、質の面では不満の声が高まるばかりである。

3月中旬、区役所で合った若い6人の女性指導員は口をそろえて言った。「自分の子どもがその年になったら子ども館ではなく普通の幼稚園に入れたい」と。指導の内容に自信が持てないというのである。子ども館のあいまいな位置づけを最も強く感じていたのは、実は当の札幌市だった。48年夏、子ども館も含めた今後の幼児教育のあり方を市の幼児問題審議会が諮問した。3年後の51年11月にでた答申—子ども館の性格を「地域社会の崩壊と核家族化に対応するもの」と

[66]

位置づけるとともに「幼稚園を模倣するのではなく、自由な遊びを中心に体力づくりを進める。将来は3才児に重点を置くべきだが、一挙に解決しない現状では、その間の経過措置はやむを得ない」とした。市立の幼稚園数が10大都市の中で下から2番目という現状の中で、札幌市はこの子ども館を「全国で唯一のユニークな制度」と自慢すらしてきた。

しかし、幼児教育の基本的な理念を十分確立しないまま、やみくもに入れ物だけを拡大してきた面は否定できない。中身の充実よりも、入れ物の普及に重点を置いてきたのが国全体の幼児教育の象徴といえそうだ』(武田記者)

4月14日受付けが終了する。その結果、昨年を約900人上まわる26,900人の申込が殺到した。またしても、各区では、指導員が会場調整のため開館日近くまで、連日連夜各家庭に電話で対応した。しかし、事前に全員入館を打ち出しているから未収容児を出したた

[67]

めに、父母からの抗議の電話は、例年になく厳しいものがあった。

また、母親からの仲よし子ども館のあり方についての新聞の投書もあいついであった。その中の1つに「私は3才児については、集団に触れさせる機会を設定するだけで良いと思います。そして、もっとお母さん方を安全対策のために活用していただきたい。つまり従来のように保母さんがひとりで苦勞するような高度な保育内容にするのではなく、ご近所のお母さんとのコミュニケーションができ、子ども同士が顔見知りになるキッカケをつくる場でよいでしょう。こうした考え方なら、子どもの数が多くても保母さんに、そう大きな負担とならず全員を収容できると思います。4才、5才については、やはり、幼稚園が足りないので、充実した指導を希望します」(西区 相馬さん) というようなものであった。

市では、51年11月に提出された「札幌市に

[68]

おける幼児教育等のあり方」の答申に基づいて、仲よし子ども館のより具体的な目標、内容及び指導方法等について研究協議を行うため現場の指導員、学識研究者からなる「札幌市仲よし子ども館専門者会議」(座長 笹森守氏)を結成した。同会議は答申をかみくだきながら、現状にいかにとり入れていくかを議論しようとするものである。しかし、それが机上の論となることを恐れ、仲よし子ども館に参加する母親約1万人に対して大規模なアンケート調査を実施した。それによって、仲よし子ども館に通う母親の意識を知り、本来あるべき子ども館とのギャップの度合いを計ろうとした。

[69]

—昭和54年—

この年も2班増班することになった。その意味は次のような理由からである。第1に例年だしている未収容児減を目ざす量的な面、第2に、1人の保育士に対する受け持ち幼児数の減、すなわち質的向上の面からであった。

この26班体制で入館希望者を募集した。募集に際して、昭和61年度より3才児を指導対象とすることを打ちだした。

その結果、入館希望者は昨年を1,200人ほど下回る25,678人に落ちた。理論的入館数値は約26,000人である。したがって、全員収容は可能であるが、一部会場に希望者が集中しているため、全員収容は困難が予想された。各家庭に電話を入れ調整を試みたが、辞退者684名、未収容児243名を出さざるを得なかった。その数の内訳は3才児であった。

なお、希望者数が落ちたのは、新築の私立幼稚園が7園増え、増改築した園が9園あり

[70]

合計約2,000名の間口増と無関係ではないだろう。

また、前年から、カリキュラム内容を、より子ども館に適したものにしようとする試みがつづけられ、この年から時にはお母さん方にも先生の役をしてもらう「お母さん先生」を各区の実情に合わせてとり入れようとする動きもでてきた。指導内容も、健康づくり、体力づくり、友だちづくりを目標として、自由保育形式も取り入れる等新たな研究課題に取り組みはじめ、その成果に大きな期待が寄せられている。

[1]

あとがき

“嗚呼
西の河原よ 窓岩よ
冬は苛烈なる
日本海の怒涛と担対峙
夏は虎杖の競い
立ち蟬しぐれふり泣ぐ
この台地
まさしくここに
60 有余年に亘り
教育の灯をともし続けた
親と子とそして教師の
哀歎の歴史があった”

この文は、今日だれ一人として、訪づれることのなくなった廃校舎の玄関わきにある記念碑にきざみこまれていた。その校舎の名を“安内小学校”といい、険しい積丹半島の突端にあった部落のはずれの岩肌を削り取るようにして建てられていた。その安内部落とて今

[2]

はもう人はいない。その碑の上には、おそらく最後に残った子ども達と教師が作ったにちがいない漁民親子の像が海に向って立っており、漁場として栄えた、かつての部落の面影をしのばせている。

近くの部落に住む古老の話によると、その校舎を創るため、部落民総出で何日もかかって厩を削りとったという。道ではない道を建築材を肩にしょって運びこんだという。

そういえば、屋外運動場は、ドッジボールを思いきってするには狭ますぎた。しかし、部落唯一の広場で遊ぶ子ども達は、どんなにうれしかったことだろうか。

この、親と子と教師がともに学校を築き上げていこうとする姿の中にこそ、真の教育の場があるように思えてならない。

幼稚園教育は、100余年、保育行政は、年そして先の安内小学校は、60余年の歴史があった。「仲よし子ども館」は今、20年目

[3]

をすぎようとしている。親も子も指導員も忌憚のない考えをのべ合い、切磋琢磨し、地域に根ざす活動を展開していく限り、その歴史はますます深まっていくにちがいない。同時に、その歴史の責任は、誰れよりも地域住民にあることを私達は自覚したい。